

# 前角博雄老師密葬儀

## 突然の遷化を哀悼

—— 海外の指導者育成に前人未踏の足跡 ——

帰国中に急逝した曹洞宗のロサンゼルス禅センター主管・前角博雄老師の密葬が五月二十日午前十時四十分から、東京・品川の桐ヶ谷斎場で、大雄山最乗寺・余語翠巖山主の乗炬師により営まれた。アメリカから慧鏡夫人や子供、遺弟らが駆けつけ、国内各地から多数の僧俗が参列して、海外での指導者育成に前人未踏の足跡を残した前角老師の突然の遷化を哀悼した。葬儀委員長を駒澤大学の奈良康明学長、副委員長を駒沢女子大学の東隆眞副学長と大本山永平寺の松永然道国際部長がつとめた。

前角老師の訃報は世界各地の弟子たちに衝撃をもって伝えられた。各地の禅道場では甲斐の摂心修行に入り、日本での密葬儀と時を同じくして読経が行なわれた。本葬儀は百日

思い出のアルバムから

昭和七年 俊雄兄と博雄老師



大田原 黒田師が渡米



黒田博雄氏

大田原 市光真  
寺住職 黒田白  
純氏の

次男博雄師(三五) (駒沢大学卒)は  
このほか米国ロスアンゼルス曹洞  
宗團理事會よりの招請により同地  
開教師として渡米することとなり  
五月二日神戸出帆の山崎汽船で出  
発することとなった。

同氏は希望者七十六名中二名の選  
に入つたもので滞米五年の予定。

昭和31年5月 下野新聞より

思い出のアルバムから



桐ヶ谷寺方丈と御母堂



光真寺方丈と共に



法話中の前角老師

後にアメリカで厳修された。

戦後四十年間にわたり、アメリカ、ヨーロッパ各地に曹洞禅の道場を開き、多くの外国人子弟を育成した。出家得度の弟子五十人余を輩出し、嗣法の弟子も生んだ。授戒の戒弟は八百人以上にのぼっている。宗務庁主催の「伝道教師研修所」の主任講師を三回にわたって務め、外国籍を有する曹洞宗僧侶に対する、外国人による法灯伝持の道を開くため尽力した。

東京・品川の桐ヶ谷寺三世で、現在は東堂。開創した道場はアメリカに六カ寺あり、ロサンゼルス禅センター佛真寺の開創二世、禅マウンテンセンター陽光寺の開創二世、禅コミュニティ・オブ・ニューヨーク禅真寺の開山、観世音サンガ・ワサチ禅センター法真寺の開山、禅マウンテン・モナストリー道真寺の開山、禅コミュニティ地藏院の開山になっている。

佛事師は、秉炬師を大雄山の余語山主、奠茶師を桐ヶ谷寺の本寺である東京・港区の小坂機融泉岳寺住職、奠湯師を群馬県桐生市の橋本弘雄大雄院住職、逮夜導師を静岡県榛原町の西脇悦道釣学院東堂、初願忌導師を神戸の志保見道元八王寺住職がつとめた。

十九日は逮夜念誦の後、遺弟代表が一人ずつ追悼の辞を述べた。法嗣である禅真寺の徹玄グラスマン師は嗚咽をこらえて、「師に最初に会ったのは三十年前だ。私が教わったことは、生きるときは生きる、死ぬときは死ぬということだ。あまりにも早い死に言葉もない。老師が遺された教えを継承し、老師に恥じないように精進する」と新たな決意を表明した。

また法真寺の玄法マーゼル師、道真寺の大道ローリー師、地藏院の澄禪ベイズ師は、「老師の身体全体が教えだった。老師のいのちは観音のように輝いていた。私の人生は老師の縁によって活かされている」「老師は西洋に禪を弘めるために渡米し、アメリカで人生を終わるつもりだと言われた。自分の語学力で法を伝えることができたらうかと悔いておられたが、老師の言葉は充分に私どもに伝わり、法を受けとめることができた」「亡くなる前に母の墓参をしたことを聞いた。老師の母に対する深い愛を、老師にいただいた法と受けとめている」とそれぞれに感謝と哀惜の言葉を捧げた。

法類を代表して、実弟である横浜市黒田武志善光寺住職が謝辞を述べ、前角老師が神戸から渡米した時の逸話を披露。「渡米して四十年、独立して三十年近くになる。今日、世界十カ国と法縁を結び、十数の禪センターを設立した。世界に誇るべき弟子をたくさん育成し、六十有余にして世を去った。その後の人生は残された私たちの公案と受けとめている」と心情を語った。

二十日の密葬では、曹洞宗の伊東盛熙宗務総長、駒澤大学の鈴木格禪教授、駒沢女子大学の東隆眞副学長、一燈園の石川洋同人、桐ヶ谷寺の斎藤稔総代が弔辞を捧げ、生前の道業を称えた。

伊東宗務総長は、前角老師がロサンゼルス禪センターの基礎を築き、禅ブーム興隆の大拠点として注目され、その活動は米国内はもとより、メキシコ、イギリス、オランダ、ドイツ、ポーランド、オーストラリアにまで及んだこと。また学術面でも「黒田インステ

思い出のアルバムから



桐ヶ谷寺にて  
グラスマン老師と  
無量師



光真寺墓参中の老師



昭和60年頃  
品川駅にて

「イチュート」を創設して八冊もの英文学術書を出版するなど、積極的に曹洞禪の国際的参究に貢献したことを指摘。

さらに宗務庁主催の伝道教師研修所の主任講師をつとめ、懸案だった外国での指導者育成の端緒を開いたことを挙げ、「特に法灯の伝持を強調された師の教えは、宗門の命脈として北米修行の原点となろう」と、その功績を高く評価した。

鈴木教授は「あなたが正法眼蔵についての件でお電話を下さったのは、おかくれになる僅か二日前のことでした。そのあなたのお声の温もりが、まだ私の耳の底に親しく残っています。そのお声の温もりの未ださめやらぬ間に、あなたは突如、化を他界に遷されてしまいました」と切々と「惜別の辞」を読んだ。

「あなたには急ぎ現し世を去って、彼の地に赴かねばならぬ使命がおりだったのでしょうか。あなたは御両親様の誇りであり、御兄弟の皆様のご光であり力でした」「至誠熱血の人、博雄大和尚。あなたは不毛の異国に仏法の真実を担われた、大いなる伝道の勇師でした。」——鈴木教授は遺影の前にして痛哭の情を隠そうとしなかった。

東副学長は、七月に渡米して前角氏の主宰する禅センターなどを視察する計画があり、その打ち合わせで五月八日に桐ヶ谷寺で前角氏らと歓談の一刻を過ごしたのが最後になったと無念の想いを吐露。

愛娘が写った一枚の写真を見せてもらった時の、前角老師の「少しはにかんだような、少し照れたような、やさしい表情」を忘れることはないと言葉に語りかけ、「約束通り訪米

行脚の旅に出発する所存だ。悲しいことに、これは前角老師追悼の旅、前角老師の御遺跡巡礼の旅となる」と述べた。

長崎で訃報に接したという石川同人は「自らを生んで下さった母親の報恩のために、身を粉にして尽くして下さった母親のお墓参りを済ませて亡くなったのは、これ以上の大往生はない。それにしても早過ぎはしないか。行き先を見失っている世界に、あなたの死は世界の損失です。あなたは本当の種蒔きをなさった。お別れは本当の始まりであることを教えて下さっている」と語りかけた。

桐ヶ谷寺の齋藤総代は「卒然と泰山木の花散りし」と追悼の句を捧げた。曹洞宗の北米開教総監部からフアクシミリで届いた山下顕光総監の弔辞も読み上げられた。

余語山主は「薫風浪藉門良畔 信手撮来桐谷辺 超短越长天地宝 大山自重乾坤禅」と乗炬の香語を唱えた。法要後、前角老師が残した遺文について「最後の教えといふべきものだ。如是之法とあり、現成公案とある。共に同じことだ。老師の真髓であろうと思う。このことを参究されよということだ」と垂示した。

葬儀委員長の奈良学長、法類代表の光真寺・黒田俊雄住職が謝辞を述べ、遺弟代表の徹玄グラスマン師は「三十五年余にわたり老師との御縁をいただき、修行させていただいた。二十六年前に出家得度を受けた。老師の法は温かく私どもを包んでくれた。ある時、老師は立ち働く人の後ろから団扇であおいで風を送った。その人が振り向くと、あおぐ手を止める。前を向いている時は後ろからあおがれているのを見ることはできない。老師から学





老師の高弟の方々＝密葬遠夜

んだのは、そのようなやさしさだ」と遺徳を偲んだ。葬儀副委員長の松永師が閉式を告げて密葬を終えた。この後、祭壇から柩が降ろされ、参列者は遺体を菊の花で飾って最後の別れを告げた。柩はアメリカから駆けつけた遺弟の手で火葬場まで運ばれ、茶毘に付された。

曹洞宗の海外開教は、外国人僧に対する外国人自身による法灯伝持が近年の課題となっていた。そのための制度や機構の整備が進められ、伝道教師研修所における特別摂心の修行など着々と具体的ステップが踏まれてきた。その課題を担い、遂行する中心的役割を前角老師は担っていた。マスコミに禅を派手に宣伝する家風ではなかった。禅仏法を着実に異国に根づかせ、育てるために、彼の地に骨を埋める覚悟を秘めて、静かに燃え続けた。